

宗教とは何か

銚之原 善 章*

What is Religion ?

Yoshinori Hokonohara

The key to understanding religion is the understanding of religious desire. This arises, when one's life itself becomes a problem, while in human ordinary desires it is the things for it not the life itself that become a problem. One's life itself becomes a problem, when it is faced by some negations to itself.

The negations are death, loss of purpose, work, one's beloved, one's beliefs etc. to which one has devoted one's life. Death negates one's life wholly and directly. All the others negate it in meaning and worth. When one is confronted by these negations, one's life itself becomes a problem in anguish. In such situations the desire for eternal life and the desire for radically giving meaning to one's life arise. These are religious desires.

Religion aims to satisfy these desires. For this purpose it posits some transcendent such as God and Buddha, because in religion the transcendent is essential to satisfy the desires both for an eternal life and for radically giving meaning to one's life.

The core of religion as human performance is its close relationship with the transcendent, which is generally the belief in the transcendent. Only by this can a human being obtain both an eternal and a meaningful life. But in Buddhism and Christian mysticism, this is the wisdom or the knowledge of the transcendent which is obtained in the communion with it.

The religious life with such a belief and wisdom is a transcendent-centered life leaving everything to it, while the ordinary life is a self-centered one. In this religious life there are such deep feelings of relief and high state of mind that cannot be understood by people living an ordinary self-centered life.

1. 宗教的要求

(1) 宗教理解の鍵

宗教とはそもそも何であろうか。宗教は、先ず、人間の営みの一つであると言える。そして、

* 教養部

人間の営みは何らかの人間の要求或いは欲求を満たすためになされるものである。宗教という人間の営みは、いかなる人間の要求を満たそうとてなされるのであろうか。ところで、宗教は、人間が存在している所どこにでも、存在しているものである。それは殆ど人間存在と共に古いものである。そうするならば、宗教がそれに応え、それを満たそうとするその人間の要求は、恐らく、人間の本質的な要求、即ち人間の本質から生じて来るような要求であろう。

それでは、それによって初めて宗教が真剣な問題になり、場合によってはそれが求められるようになる人間の要求—これを我々は「宗教的要求」と呼ぶことにする—は、いかなる要求であろうか。この宗教的要求は、宗教が何であるかを理解する鍵である。逆に、この宗教的要求が理解されない限り、宗教もまたほんとうには理解されないであろう。そこで、宗教が何であるかを理解するためには、先ず、宗教的要求がいかなる要求であるかを明らかにしなければならない。

(2)人間の一般的要求

人間の要求或いは欲求は、普通には、人間の生きるための要求であると言える。人間は生きるために様々なものを求める。先ず、単に生きるために、即ち、自然的な生命を保つために、食べ物や住まいや衣服等々を要求する。これら衣食住等は人間が単に生きるために無くてはならないものである。人間は、先ず単なる生のために、これらのものを要求し、また、問題にするのである。

次に、人間は、単に生きることが或る程度確保されるならば、それだけでは満足できず、更に、よく生きること、よき生を求める。そして、このことのために、また、いろいろなものを要求する。例えば、快適な生というよき生のために、単に生きるためには必要でないような豊かな衣食住やその他の豊かな生活手段、生活環境等を要求する。また、楽しい生というよき生のために、趣味やスポーツや遊び等を要求する。更に、真善美という普遍的な価値を有する生、文化的生というよき生のために、学問や芸術や道徳を要求する。学問は真なる判断というよき生を目指すものであり、芸術は美的感情というよき生を目指すものであり、道徳は善なる意志或いは行為というよき生を目指すものである。

それでは、これらの単なる生のための要求とよき生のための要求の中に、宗教的要求、すなわち、それによって宗教が切実な問題になって来るような要求も含まれているであろうか。もし宗教が、単にいわゆる「現世利益」のために、すなわち、病気が治ったり、人間関係がうまく行くようになったり、道徳的に立派な人間になったり、その他の願いごとが叶ったりするというようなことのために、存在するものであるならば、宗教的要求もこれらの単なる生のための要求或いはよき生のための要求の中に含まれるということになるであろう。しかし、もし宗教が専らこのような現世利益のために存在するものであるならば、宗教は今後益々その存在意義を失って来るのではないかと思われる。何故なら、科学的な知識と技術が今後益々進歩することによって、例えば、病気を治すためには、近代的な病院へ行った方がはるかに確実であり、願いごとを叶えるためには、そのためのまともな合理的努力をした方が一層確実であるからである。現代の、或いは将来の人間は、現世利益のためならば、宗教をさほど必要としなくなると考えられるのである。

しかし、宗教は、本来、以下に述べるように、単に現世利益のためにあるものではないのである。したがって、宗教的要求は我々の単なる生のための要求でも、よき生のための要求でもないのである。

しかるに、我々の日常的な生活、営みはこの単に生きるためにか、或いは、よく生きるためになされるものである。したがって、我々の日常的な生活・あり方においては、宗教は、本来、真剣な問題にはなっていないものなのである。このような我々の日常的なあり方は、自己の生そのもの或いは自己の存在そのものを無自覚的に肯定し、前提した上で、自己の生或いは自己の存在のためのものを絶えず外に求め、問題にしているというあり方である。

(3) 永遠の生への要求

ところが、人間は、知性を持つが故に、自己が生きていること、存在していることを自覚しつつ生き、存在している自覚的な存在者である。このような人間にとっては、何かをきっかけとして、自己の生そのもの、自己の存在そのものが問題化し、もはやそれを単純には肯定し得ず、深く苦悩するということが起こり得る。そして、そのきっかけとは、自己の生そのものを否定するものに出会うという体験である。

先ず、自己の生を端的に否定するものは死である。人間は必ず死ななければならないものである。しかしながら、我々がその死にまざまざと直面するということは、普通は、非常に稀なことである。しかし、我々は、病気になったり、事故に遭ったり、年老いたりした時に、或いは、そのような特別なことがなくても何らかの機会に、死に直面するという体験を持つことがある。そのような場合、深い孤独感、不安感の中で、自己の生そのもの・存在そのものが問題化するのである。そこでは、これまで絶えず問題にし、また求めて来た自己の生のための一切の物事は、死に直面して自己の生そのものが問題化することによって、もはやどうでもよいものとして、いわば自己の関心の眼から消えて行く。すなわち、周りの一切が虚無化する。そういう、周囲の一切の物事が疎遠なものとなり、関心の視野から消えた深い虚無の深淵の孤独の中で、自己の生・自己の存在そのものが深刻に問題化するのである。(1) そして、このような状況の中で生じて来る要求は、恐らく、滅びの生から永遠の生への救いの要求であろう。そして、まさにここで初めて宗教は真に切実な問題となり、場合によっては、それが真剣に求められるようになるのである。したがって、この人間の滅びの生の、永遠の生への救いの要求こそが、真に宗教的要求であると考えられる。死は人間にとって確実なものであり、又、「人間は、生まれるや否や、死ぬに十分なほど歳取っている」というドイツの格言においても表現されているように(2)、死はいつでも可能なものであるから、人は誰でもこのような永遠の生への要求を心の奥深くに抱いているものと思われる。

(4) 生の根本的意義づけへの要求

更に、我々は、自己の生を、その価値或いは意味に関して、否定するようなものに出会うということがある。例えば、自分の生をそれに賭けていたような大きな目標や仕事を失い、挫折するという体験を持つことがある。或いは、その人あってこそ自分の人生があると思うほどの最愛の

人を失うということがある。これらは、今まで、自分の人生を意義づけ、価値づけてきたものである。これらが今や失われているのである。そのような場合、深い苦悩の中で自己の生そのものが無意味なもの、空しいもの、無価値なものと感じられ、そういう仕方では自己の生そのものが問題化するのである。また、罪の意識、罪悪感も、それが深まれば、自己の生そのものを同じように問題化せしめるものになるであろう。或いは、また、それまで自己の生を意義づけ、価値づけて来た信仰や思想を失った場合にも、同様なことが起こるのである。このような状況において生じて来る切実な要求は、この人生においていかなることが起ころうともなお揺らぐことのない程に根本的に自己の生を意義づけることへの要求であろう。そして、人間の生に対して決して揺らぐことのない程の根本的な意義づけを与え得るものは、この世、即ちこの現象界、には見出され得ないであろう。何故ならば、この世におけるいかなる目標も、いかなる仕事も、いかなる最愛の人も、そして、その他のいかなるものも、結局は無常なるものであるからである。人間の生を真に根本的に価値づけ、意義づけ得るものは、何らかの仕方では永遠なるもの、この世を何らかの仕方では越えたものでなければならぬであろう。しかるに、この後見るように、永遠なる超越者を立てて人間の生を根本的に意義づけるものは、宗教である。従って、人間の生の根本的な意義づけへの要求もまた宗教的な要求であろう。

以上から、宗教的要求とは、具体的には、有限であるとともに何らかの意味を求めざるを得ない人間の生の根本問題の解決を求める永遠の生への要求と生の根本的意義づけへの要求とであると考えられる。

2. 宗教的要求への宗教的対応

宗教は、上述のように、人間の生の根本問題に根本的な解決を与えようとするものである。そして、それは、先ず、人間の死すべき滅びの生から永遠の生への救いの要求に応えようとするものであった。我々人間は必ず死ぬものであり、また、その死がいつでも可能であるようなものであるから、心の深くにまた永遠の生への要求をも抱いているものと考えられた。そして、このような要求に応えようとするものが宗教であった。

次に、宗教は、また、人間の生の根本的な意義づけへの要求にも応えようとするものである。人間は無意味な生或いは無価値な生を生きることには耐え得ないものであり、いろいろな物事によって自らの生を意味づけ、価値づけて生きているのである。しかし、この世の物事は全て結局は無常なるものである。従って、人間は、ともすると、自らの生に意味や価値を見失いがちである。よって、人間は、本来、いかなることが起ころうとも決して揺らぐことのない程の根本的な自らの生の意義づけへの要求をも心の深くに抱いているものと考えられる。そして、そのような要求に応えようとするものもまた宗教であった。

それでは、宗教はいかにしてこれらの要求に応えようとするのであろうか。

(1) 超越者の定立

先ず、宗教は人間の永遠の生への要求に応えようとするものである。人間が滅びの生から永遠

の生へ救われるためには、先ず、「永遠の生」と言われるような何らかの永遠なるものが存在しているのだからなければならない。しかるに、この世の一切のものは、必ず滅びるもの、無常なるものであって、決して永遠なるものではあり得ないのである。したがって、永遠なるものは、この世即ち現象界を何らかの仕方では超越した領域に求められなければならない。すなわち、永遠なるものがあるとするならば、それは超越的なもの、即ち超越者でなければならないのである。かくして、人間の永遠の生への救いの要求に応えようとする宗教は、必ず、永遠なる存在者であるところの何らかの超越者を定立するということになるのである。そのような超越者は、普通、「神」とか「仏」とかと呼ばれ、更に、神や仏は、それぞれの宗教、宗派によっては、例えば、「エホバ」、「アッラー」、「阿弥陀仏」、「大日如来」等々の固有名詞でもって呼ばれているのである。このような何らかの超越者を立てない宗教はあり得ないのである。何故なら、宗教は、人間の滅びの生から永遠の生への救いを第一の課題にしているものであり、そのためには永遠の存在者たる何らかの超越者を立てざるを得ないからである。

次に、宗教は人間の生の根本的な意義づけへの要求にも応えようとするものである。すなわち、それは、いかなることが起ころうとも決して揺らぐことのない程根本的に人間の生を意義づけ、価値づけようとするものである。しかるに、上に述べたように、この世に存するいかなる目標も、いかなる仕事も、いかなる愛する人も、その他いかなるものも、それらは無常なるものであるが故に、人間の生をそれほど根本的に意義づけ価値づけることはできないのである。かくして、宗教は、この要求に応えるためにも、また、永遠なるものである何らかの超越者を立てざるを得ないのである。

以上のように、宗教は、人間の永遠の生への救いの要求と人間の生の根本的な意義づけへの要求とに応えるために、必ず永遠なるものであるところの何らかの超越者を立てることになるのである。

(2) 超越者への関わり — 信仰と智慧 —

ところで、しかし、それらの要求が叶えられるためには、単に永遠なる存在者としての超越者が存在しているということだけでは十分ではないのである。そのためには、更に、人間がその超越者に何らかの仕方では関わるということがなければならない。宗教においては、人間の超越者への関わりにおいて初めて、永遠の生への救いも、この世的な人間の生の根本的な意義づけも可能になるのである。したがって、宗教という現象の、或いは宗教という人間の営みの中核をなすものは、まさにこの人間の超越者への関わりであると考えられる。

それでは、宗教においては、人はいかにして超越者に関わるのであろうか。それは、殆どの宗教においては、中心的には、人間がその超越者を信仰するという仕方によってである。すなわち、人間の超越者への関わりの中核を成しているものは、殆どの宗教においては、超越者に対する人間の信仰である。そして、この超越者に対する信仰には、大抵の場合、人間がその死後において、或いは、キリスト教におけるように差し迫っているこの世の終わりにおいて、その超越者によって超越者の永遠の世界に救い取られるという信仰も含まれているのである。かくして、超越者に

対する信仰において人間の永遠の生への救いが、——層正確に言うならば——永遠の生への救いの確信が、成立するのである。

ところで、今、人間の超越者への関わりの中核は、殆どの宗教においては、超越者に対する信仰であると言ったが、多少例外的ではあるが、必ずしもそうとは言えない宗教もあるのである。その典型的なものは仏教である。仏教は「智慧の宗教」と言われる。ということは、仏教においては、人は、本来、智慧 (paññā 般若) によって、永遠の生命を得ることができ、また、この世の生を根本的に意義づけることができるということである。⁽³⁾ このようなことが可能になるとされるこの仏教の「智慧」は、勿論、何らかの根本的な真理の知性による知という普通の智慧ではない。これはいわゆる「悟り」の智慧、即ち「悟り」という根本体験において成立する智慧である。この智慧は、例えば、次のように語られるようなものである。

「私どもが一般にものを見る時、〔それらのものは〕いろいろな差別の存在として見られます。いわゆる柳は緑、花は紅というように柳は緑の葉を青々と垂れており、花は真っ赤に咲いている。山は高くそびえ、川は低く流れている。すべての存在はそのように差別の姿をあらわしております。そのようなそれぞれのものを個々のものとして識別するのではなく、その差別の底に同一の、根源的とでも言うべきいのちが流れている。一何と申しますか、宇宙生命とでも申しますか、山も川も、鳥や獣も、人間も、すべてのものに共通のいのちが根底には流れている、その同一のいのちが山となり、川となり、人と現れ、獣と現れ、或いは木となり、草となる、というふうに差別の相に現れている。その差別の相そのままにその根源に一つのいのちが流れていると見ることのできる深い深い心のまなこと申しますか、そういうものを仏教では智慧と申します。それが般若というものです。」⁽⁴⁾

すなわち、これによると、この智慧は自己と他の一切のものを貫いている根源的ないのちの洞察とされている。ここで「根源的いのち」と言われているものは、原始経典では、「聖なる真理」(Ariyasacca)、「真如」(Tathatā)、「不死」(Amata)等の言葉で呼ばれており⁽⁵⁾、更に、その後の大乘仏教では、「空」(Suññatā)、「仏」〔Buddha 仏陀。意味：①覚者 ②(覚者が他の一切のものと共に本来それであるところの)真理。ここでは②の意味〕等の言葉で呼ばれているのである。これは、時間・空間的な一切のものを貫いているものとして、超越的なものであり、永遠なるものである。そして、これは人間のみならず一切のものが本来まさにそれであるところのものである。したがって、このような真理の知である智慧を得るならば、人は、自らが、他の一切のものと共に、生きたり死んだりしているそのまま、既に永遠のいのちの内にあるということを確認することができるのである。また、この智慧においては、一切のものが、永遠なる真理として、或いは、その永遠なる真理の現れとして、見られるのであるから、我々の生もまた価値あるもの、尊いものとして根本的に意義づけられることになるのである。更に、この智慧は——この真理をなお超越者と呼ぶならば——人間が本来それであるところの超越者そのものに成ってそのものを知るというような体験知であるから⁽⁶⁾、この智慧もやはりなお一種の超越者への関わりであると言いうことができるであろう。

なお、超越者に対する信仰よりもむしろ超越者の知を一層重視する宗教は、仏教の他にもなお見られるのである。例えば、キリスト教世界において絶えず異端とされ、迫害されながらもなお存続し続けて来たキリスト教神秘主義(the Christian mysticism。最も有名な神秘主義者：Meister Eckhard, 1260 頃-1327)もそのような宗教の一つである。このキリスト教神秘主義は、救いのためには、信仰よりもむしろ、神と一体になることによって神を知ることが一層重要であるとして、神と一体になる神秘的な体験を目指すものである。

以上から、宗教とは次のようなものであると言い得るであろう。

<宗教とは、何らかの永遠なる超越者を立て、信仰や智慧というような仕方での超越者に関わることによって、滅びの生から永遠の生への救いの要求と生の根本的な意義づけへの要求という宗教的要求に応えようとする人間の営みである。>

(3) 宗教的生 — 超越者中心の生 —

最後に、一言、宗教によって生きる生活、宗教的生或いは信仰生活について述べる。このような宗教的生とはいかなる生或いは生活であろうか。我々の普通の生或いは生活は、上に述べたように、一般に自己が自己のために、すなわち、自己の維持と発展のために、生きている生活であり、したがって、自己中心の生であると言える。このような生においては、自己の維持と発展のための要求は、この世においては、必ずしもかなえられるものではないが故に、挫折があり、死があり、また、恐怖があり、孤独があり、苦悩があり、不安があるのである。

これに対して、宗教によって生きる生活、宗教的生は、自己を越えた超越者に自らを委ねて、超越者に従って生きるという超越者中心の生である。

次の新約聖書におけるパウロの言葉は、イエス・キリストへの信仰を持ち、「キリストのものになる」ことは、キリストの霊＝神の霊が我々の内に宿ることであるということを行っているものと思われる。

「神の霊があなたたちの内に宿っているかぎり、あなたたちは“霊”の支配下にいます。キリストの霊をもたない者はキリストのものではありません。」⁽⁷⁾

そして、更に、彼は、そのような信仰者の生は、自分が生きることに於いてキリストが生きるというような生であるとして、次のように言っているのである。

「わたしは、キリストといっしょに十字架につけられています。生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。」⁽⁸⁾

宗教的生については、仏教を初め他の宗教においても、これと同じようなことが言われ得るであろう。このような生においては、永遠なる超越者に身を委ねて、超越者と共に生きることによって、深い安堵感が生ずると共に、我々の普通の自己中心の生には窺い知れないような心の高い境地が存するであろう。

[注]

(1) このような状態は、“一切は虚無である”と感ぜられる状態であり、心理的状态としてのニ

ヒリズムである。1880年代に、ニーチェ (Nietzsche 1844-1900)が、今後2世紀のヨーロッパの避けられない運命になるとして、問題にした「ヨーロッパのニヒリズム」(der europäische Nihilismus)もこのようなニヒリズムである。但し、これは、古代末以来ヨーロッパの人々の生存を意義づけ、価値づけて来たキリスト教の神、及びこれと同じような性格を持つプラトン主義的な哲学(形而上学)の神が、信じられなくなることによって、生ずるものであり、次の(3)で述べる状況下で生ずるニヒリズムである。このように、宗教が問題になって来るものにはニヒリズムがあり、ニヒリズム克服の重要な試みの一つとして、宗教が存すると言えよう。拙論「ニーチェの永遠回帰の思想について」(福井工業大学研究紀要第25号第二部)参照。

(2) M. Heidegger; "Sein und Zeit" 245頁。

(3) 仏教の宗派の中には、浄土系仏教に典型的に見られるように、「信心」を、即ち、信仰を強調するものも確かに存する。しかし、これらの仏教も、信仰を通じて、更に、「智慧」と同様の境地へ導くものと考えられる。例えば、観世音菩薩に対する信心を説いている「妙法蓮華経 観世音菩薩普門品第二十五」の冒頭のところに、次のような言葉がある。

「若し無量百千万億の衆生あって諸の苦悩を受けんに、是の観世音菩薩を聞いて一心に名を称せば、観世音菩薩即時に其の音声を観じて、皆解脱することを得せしめん。」

この中の「一心称名」は、原始経典において「真理」への道として説かれる「三昧」(samādhi 定)に相当し、その三昧はやがて「智慧」になるとされるのである。従って、この経は、観世音菩薩への信心を通じて、更に「智慧」の境地へと人々を至らしめようとするものではなからうか。

(4) 大森曹元; 「般若心経講話」(柏樹社)18頁。

(5) 拙論「根本仏教における『智慧』(三)」(福井工業大学研究紀要第23号第二部)参照。

(6) 仏教においては、座禅その他の三昧行を通じて智慧を得て、宇宙を貫く真理を悟るということが目指される。この悟りは自分が自分と別なものである真理を悟るということではない。真理はまさに自分が、他の一切のものと共に、真実にはそれであるところのものである。したがって、真理を悟るということは、自分がその真理そのものになってそのものを悟るということなのである。

(7) ローマ信徒への手紙 第8章 8-9

(8) ガラティアの信徒への手紙 第2章 19-20

〔参考文献〕

(1) 西谷啓治著 『宗教とは何か』(創文社 昭和36年刊)

(2) 新約聖書 共同訳 (日本聖書協会 昭和53年刊)

(3) 拙論「根本仏教における『智慧』(一)」(福井工業大学研究紀要第20号第二部)

(4) 拙論「根本仏教における『智慧』(三)」(福井工業大学研究紀要第23号第二部)

(平成10年12月 8日受理)